

## 鳥取県西部地震から10年目フォーラムでの講演録

平成22年10月6日

米子市文化ホール

皆様、おはようございます。昨日に引き続きまして、今日は米子でこのフォーラムのパートⅡをさせていただくこととなりました。本日は大変にお忙しい中にも係わりませず、室崎災害復興学会の会長様、あるいは山中先生、また後ほどは泉田知事もお見えになりますが、全国各地から多くの皆様にお越しいただきましたことに感謝を申し上げたいと思います。そして、気象庁の地震火山部長の西出部長さんもこの会場のほうにお越しをいただき、我々と一緒にこのディスカッションに加わっていただくことになりました。本当にありがとうございました。内閣府の阿久津政務官からも心温まるメッセージをいただいたところでもあります。集まった我々はこれからの安心と安全の社会をこの地域社会をもう一度作り上げていこうということでもあります。10年前の地震、今でも思い起こされるわけですが、その地震からちょうど今日で10年目の節目を迎えました。全国各地から様々な善意を寄せられ、そして地域の中での助け合いの暖かみに触れ、我々は復興を遂げて立ち直ることができました。今日のこの日にまず多くの皆様に感謝を申し上げたいと思います。そして、我々が忘れてはならないのはその地震から学んで、次には安心できる地域社会を構築していくことだと思います。これは地震国家と言われる日本におきまして、とって大切な課題であります。その意味では、いろんな地域間で連帯をし、知恵を出し合って、そしてまた国だとか、あるいは県や市町村といった行政も加わり、本当に安心できるシステムを作っていかなければならないことだと思います。そのためには、実は住民の皆様の自助や共助がとって大切な役割を果たすこと、これも我々の地震の経験から明らかになりました。現代社会の申し子とも言えるボランティアだとか、NPO という新しい社会活動が花開いております。こうした皆様のお力というものも大切なものになってきています。大きな力を寄せ合いながら、我々としては一つ一つの安心を一人一人の命を創りあげていかなければならない、守っていかなければならないのだと思います。鳥取県西部地震であります、大変に大きな地震でありマグニチュード7.3という地震でありました。これは鳥取県の東部で発生しました鳥取大地震、昭和18年のことでありました。その時以来の大地震であり、阪神・淡路大震災もマグニチュード7.2でありますので、それを上回るような規模であったということでもあります。その西部地震でございますけれども、幸いなことに鳥取県内で死者はなかったわけでありまして、これは助け合って、お互い支え合ってこの結果を生み出したものでありまして、今から考えると、これは最大の収穫だったなあというふうに思います。ひょっとすると、この間まで「ゲゲゲの女房」というドラマをやっていましたが、妖怪たちが守ってくれたのかも知れませんが、この鳥取県西部地震、幸い1人も命を失うことがなかったわけでありまして、その震源は鳥取県の西伯町でありましたけれども、このように関東地方から果ては九州のほうまで揺れを感じるところが広がったわけでありまして、今でもこの地震の活動は完全に終わったわけではなくて、つい先日にも下から突き上げるような、そういう揺れがあったと伺っております。ただ、この当時のような凄惨な状況は今日ではないわけでありまして、復興を遂げてきた歴史であった

と思います。先ほどもご紹介がありましたように、横ずれの断層の東西ですれ違うようなそういう断層が引き起こしたものでありました。大きな揺れを観測した鳥取県の状況をご覧くださいますと、一番揺れが強かったのは中山間地の日野町、それから、それと併せて境港市、沿岸部のほうであります。また、これに続いて当時の西伯町や会見町、溝口町、岸本町、日南町、江府町、淀江町、日吉津村、こうしたところで6弱の揺れを観測し、米子市では5強の揺れを観測したということでありました。ただ、これは観測点でありまして、実際にはどれほどの震度がそれぞれの地域であったかというのは、一概に本当は言えないんだと思います。例えば、西伯町と会見町と、それから溝口町とに跨るところに鳥取花回廊という県営のフラワーパークがございますけれども、そのフラワーパークでは設計では震度7でも壊れないものが壊れました。実は、風評被害を気にしまして、営業は一部を閉鎖しながらも続けていったんですけれども、そういう大変な揺れがあったことは間違いないわけでありまして、できたばかりできちんと設計したのも一部破断をするということがございまして、ところによっては大変大きな揺れがあったと思います。そういうようなわけで、各地で様々な被害を引き起こしたわけでありまして。これが先ほどもご覧いただきました地震の余震の分布図であります。これを見ますとくっきりと断層が浮かび上がるわけでありまして。日野町のほうから西伯町を經由して島根県のほうへと抜けていく、そういう余震の地図でございますけれども、このように断層が走っていたわけでありまして。そういった関係で島根県の伯太町だとか安来市、あるいは岡山県の新見だとか、そうしたところでも被害が発生をしたわけでありまして。これが当時の被害の状況を振り返る一助として持って参りましたけれども、左上のほう、さっきの画像にも出ていましたけれども、境港市の出雲大社でございます。出雲大社の上道協会なんですけれども、これが、出雲大社が壊れたということが大々的に最初、初期に報道されましたら、島根県の出雲大社が壊れたと錯覚する人が随分全国で出ました。あっちに風評被害が広がってしまったわけでありまして。それから同じ境港市で、下のほうは液状化現象が起こっております。竹内の工業団地の中でありまして。ここに限らず弓浜半島一帯で起こっています。日吉津村だとか、米子市でも起こりました。不思議なことに帯状に起こるんですね。東西に帯状にこうした被害がザーッと強い地域が発生をいたしました。おそらく地震の波動との関係なのかなあと思ったりしました。右にございますのは、これは今ベニズワイガニの漁が始まっておりますが、そのカニかご漁船が着く漁港の岸壁、境港であります。これは、本来まっすぐです。右側のほうの喫水線もまっすぐでありますし、ここにある排水溝も上にかぶせ物がしてありますが、全部まっすぐだったわけでありまして、支柱ごと横のほうにずれるようにして倒れている。いっぺんに地震波が襲いまして、そしてこのように押し出してしまったような形になったんだと思います。目の前に見えるのが島根県の横の半島でございます。よくは分かりませんが、わたしも専門家でないのでよく分かりませんが、どうしてこの境港で地震が大きくなったのか、ひょっとすると島根半島の強い岩盤が影響したのかもしれない。従いまして、挟み撃ちをするように鳥取県内では南のほうの日野町から北側にかけて、さらに境港というところで大きな揺れを観測をされたということでありました。今日、特にテーマに取り上げています中山間地でありまして、多くの被害が発生しました。左上は旧の溝口町、現在の伯耆町でありまして、日野町と溝口町を結ぶ県道のところでありまして。上からバラバラと落ちてきたわけでありまして。中国山地は花崗岩質でございまして、

そんなに頑丈なところばかりでもございません。従いまして、急峻なところでこういうように上から落ちこちてきた状況がございました。図をよく見ますと、写真の真ん中に白い車があってペシャンコにへしゃげています。この中に実はご夫妻が乗っておられたんですけども、助かりました。幸い、後部座席のほうにおられたわけでありまして、助かったということでありました。左下のほうは、これは日野の老人保健施設の入所された方ですが、屋外のほうへと避難された様子であります。右上は西伯病院の患者さん、こちらも避難をされました。また、下のほう、避難所の医療班で検診を受ける被災者の様子がございます。多くの医療ボランティアの方も出ていただきまして、巡回をしていただいたりご協力をしていただきました。日野では日野病院が大変被害を受けましたけれども、そういうわけで地域の保育所でしたか、施設のほうにいったん避難をされましたが、幸い建てかけてほぼ完成していた新しい病院のほうに移ることになりまして、何とか機能を保ったということがございました。それから住宅被害、これも中山間地を中心に大きく発生をいたしました。全壊の家屋、赤紙を貼った家屋が394戸ございました。それから半壊だとか一部損壊を合わせますと、実に1万7,000棟の被害家屋が出ました。だから、住宅被害が非常に大きかったという状況がございました。亡くなられた方こそおられませんでしたけれども、やはり家の中におられた方とか、いろんな形で怪我をなされた方がいらっしやいまして、141名の皆さんが怪我をされたということもございました。左上のように完全にへしゃげてしまった家があったり、それから右のほう、これはこの地方の特性かもしれませんが、中山間地の坂道のところに家を建てるわけでありまして、下のほうに土台として石垣を作るんですね。そういう石垣が壊れてしまっています。また左下のほう、先ほどもございましたが、多くの家が瓦とか損傷がございまして、ちょうど地震があって数日経った時に、雨が降る予報になってまいりまして、慌ててボランティアの方々にも手伝っていただき、兵庫県からブルーシートは搬送もしていただき応援もしていただきまして、このように復興を遂げてきたわけでございますが、ブルーシートを取りあえず応急的に掛けたわけであります。実は私自身もさっきの画像にもありましたけれども、米子で開かれていました介護保険の大会のほうに出ていまして、それから県庁のほうに戻ろうとしたんですね。そうしますと米子のバイパスのほうに出てトンネルに入ったところ、車の中でありましたけれども、車がもの凄く揺れたわけでありまして。これは車がパンクしたなあと最初思いました。まさか地震が起こるとは思わないものですから。それで恐る恐るトンネルが出たところで車を止めてもタイヤは全部付いていますし、よくよく見ますと橋脚ごとみんな揺れているわけですね。最初は何のことかよく分からなかったんですが、その後でこれは地震だったんだということが分かりまして、慌てて米子に設置されました現地の災害対策本部のほうに私自身も入りました。それで、鳥取県庁に設置をされました災害対策本部と繋ぎながら、現地のほうでいろいろと手当をしたわけです。ブルーシートも、早速に各市町村から必要数についてのお話がございまして探し回りました。スーパーマーケットとか、あれは巨大な備蓄倉庫だと思いましたが、そういうところにも問い合わせをして、何とか調達できないかとやったわけでありまして、ああいうところで市販しているのは小さいですね。ですから間に合わなかったです。それでやっぱり大きいブルーシートを何とか取り寄せなきゃならない。それで、隣の兵庫県さんが阪神・淡路大震災の備蓄関係もございまして、それを融通してくださったということでありました。ライフラインとか、公共施設も

だいぶやられました。左上のほう、先ほどは日野溝口線でありますけども、このように江府町でも路肩が崩壊をして道路に亀裂が走るということ、これ随所で起こりました。実は14カ所ほどだったと思いますが、全面通行止めを行いました。現場のほうは、てんやわんやだったですね。最初にこうしたところに車が入って行くと、えらいことになるものですから。土木関係の職員総出で出て行きまして、それでパトロールをして、被災箇所を発見すると通行止めをしたり、一部片側交互通行にしたりという措置を緊急にまず取りました。それから、応急処置に入るわけであります。実は震源地の日野町の町長さん、景山町長さんですけども、景山町長さんは当時私と一緒に米子に置かれました現地の対策本部のほうで、その土木関係の指揮を執っておられました。みんな寝ずにやっていたことを今でも思い出します。それから右上のほう、JRの伯備線が土砂崩れで不通になりました。こんなこともありまして、日南町の庄山がしばらく伯備線の始発駅になりました。そうやって鉄道被害も発生しました。また下のほう、これもその晩大変な問題になったわけではありますが、旧西伯町の赤谷というところの橋でございます。この赤谷橋でございますが、これが集落に入る唯一の道路だったんですね。この橋が落ちこちてしまったものですから、例えば食糧を運ぶとか、いろんな緊急物資を運ぶにも運べなくなってしまいました。下には当然ながら川がございますので、何とかしなければならぬ。取りあえず応急ででも渡れるようにしようということを行ったんですね。それで私ども現地のほうでも、どうやってやったらいいかということで、みんな額を付き合わせてあーだこーだ議論をしました。技術者というのは大したものだなと、あの晩は本当に感謝して感心したものであります。技術者の皆さん、土木関係の職員が「これはビニールパイプでやれば何とかなる」と言うんですね。ビニールパイプで橋を取りあえず復旧しましょうということになります。皆さん、想像がつかますでしょうか。実は私よく分からずに、それを当時鳥取のほうにおられた片山善博知事のほうに電話で報告をしまして、「問題だった赤谷橋。これ何とか今晚中に復旧できそうです」と。「取りあえずみんなで話し合ったら、ビニールパイプで復旧できることになりました」と申し上げたんですね。そしたら、片山さんが「ビニールパイプでどうやって直すんだ」と言うから、「ビニールパイプを束ねるか何かして直すんじゃないんでしょうかね」と言うとお答えを申し上げたんですね。これ真っ赤な嘘でございます。後で夜が明けていろいろと話を聞いてみますと、橋というのは水の流れと交通が交差をするところがあります。ですから、水を流しながら交通ができればいいわけですね。ですから、その水路のところにはビニールパイプを置きまして、そこを後は土で埋めてしまうと。そうすると水の流れと交通は取りあえず両方確保できると、こういう仕掛けでございまして。「なるほどなあ。やっぱり技術者というのは大したものだなあ」というふうに思いました。橋を架け直すということに頭がいていたものですから、そういうことができるんだなあということも思ったわけがあります。また、右下のほうであります。夜を徹しての水道復旧作業を境港市の様子がございましたけれども、多くの世帯で断水をしました。3千数百世帯だったと思いますけども。その後も給水車が走り回るとか、近隣の市から結構応援が来ていただきまして、本当に助けていただいたことを思い出します。電気も止まりました。5千世帯余りだったと思いますけども、電気も停電をしましたけど、割と早めにこれは復旧をしました。後でよくよくお伺いしますと、電力会社の皆さんはここでの地震で大変に青くなったそうであります。それは震源地のすぐ近くが、電力の送電系統だとか、いろんな

ことで心臓部といってもいい場所だったそうでありまして、ひょっとするとえらいことになるかもしれないという危険性を感じられたんだそうであります。ただ、幸い電気は数時間で復旧をすることができました。ライフラインの復旧も大変時間の掛かったものもございました。それから産業関係であります。農業の被害は非常に大きなものがありました。百数十億ぐらい被害がありましたですね。さっきの公共土木被害も大変でありまして、だいたい5百億ぐらいだったかなと思います。そういう被害がありました。この農業の被害、水田が割れてしまうとかということがございまして、被害がネギだとか、あるいは下のほうにあります。これは当時実りを迎えていた新興梨、これが地面に落ちて駄目になってしまったんですね。右下がこれはネギです。これは、液状化で海水が噴き出しまして、塩が入ってしまいました。それでやられてしまいました。牛も受難でございまして、牛舎がやられてしまうなどで、和牛も人間と一緒に避難をしたという図でございまして。農業もここから立ち直っていきました。農業水路もやり変えたことはもちろんでありますけれども、一部の所では昨日は日野町で開かせていただきましたけれども、水田よりも水を使わない蕎麦をいっそやってみようかと。県も復旧委員だとか、みんなで協力をさせていただいたりしまして、転作を図っていったんです。今では、蕎麦が結構震源地近くの日野郡で栽培されるようになりまして、昨日シンポジウムが開かれた根雨の町でも3カ所ほど手打ちの蕎麦を出すお店ができたりしまして、そういう副産物が登場したりしました。ともかく、その農業被害はかなり大きなものがありました。西部地震からの復興であります。やっぱり初動が大事だなあとつくづく思いました。私自身もそうでありまして、鳥取県庁の職員や市町村の皆さんも、行政関係者は痛感されたと思いますが、災害対策というのは行政の基本だと思いました。目の前で困っていること、これを何とかしなきゃいけない。その解決策を考えて、そして速やかに実行する。これを続けて、間断なくやっていくこと。これが災害対策だと、この震災から教えられた思いであります。災害対策本部は直ちに設置をさせていただきまして、その日のうちに災害救助法が適用されました。まず、西伯町とか米子市、日野町、この3市町が適用され、その他の市町村にも適用が広がっていきました。一つ、その意味ではラッキーだったのは、この隣の建物でやっていたイベントがその地震の真っ最中、冒頭のビデオであります。あれが介護保険のイベントだったんです。そうしたら厚生省の幹部が大挙して来ておりまして、こっちのほうに結構な人が集まっておられました。それで私はその米子で一晩中やっていたわけでありまして。そこに、ひょっこり「もう今日は帰れなくなった」と言って、厚生省の人たちがやって来まして、「もう平井さん、いつでも災害救助法適用するから言ってくれ」と言うわけですね。「これは儲けた」と思いまして。それで、早速県庁の本部と相談をして、速やかにそういう災害救助法を適用してもらおうというようなことをしていただけたんです。ですから、非常に迅速にこれはしていただけたなあと思っています。それから、大臣だとか、当時の片山知事だとか、いろんな被災地の視察が続きました。翌日には初動をぜひしっかりやろうということで、国からは扇千景国土庁長官が来られました。そして、下のほうに写真がございまして、上は県議会の視察団です。下のほうは国土庁長官の視察風景であります。扇千景長官が久しく被災地を回っていただきまして、つぶさに現場を見ていただきました。この後の災害復興にも役立ったと思っております。この扇長官、来られたわけでありまして、記者会見の前にレクチャーをしまして、こういうような地震の状況であります。今、被害はこんなよ

うな集計をしておりますとか、いろいろなお話をさせていただきました。それで、実はその地震が起こる約ひと月ぐらい前にちょうど鳥取県西部、それから島根県東部あたりを震源とするマグニチュード7.2の地震を想定して我々が防災訓練をやった。「図上訓練をやりまして、その時に自衛隊だとか、いろいろな人たちとのパイプができて、お互いに顔も知り合えたし、非常にそういう訓練が役に立ちました」というふうに申し上げましたら、このことを扇長官が耳に留めていただきまして「へえーっ、鳥取県は素晴らしかったですね。リハーサルをしていたんですね」とおっしゃいました。やっぱり芸能人から国土庁長官になられた方は言うことが違うと思いましたが。リハーサルだとおっしゃったんですが、そんなようなことをご視察をいただいたりいたしました。その西部地震からの復興関係など、我々のほうで苦労したことがありました。道路だとか、河川、あるいは農地災害もそうありますが、国からの手厚い支援があります。これには正直助けられましたし、役に立ったと思います。しかし、矛盾を抱えるわけですね。実際に被災の現場のほうに行きますと、皆さん「いやあ、もう道路は直しますよ」「川もすぐきれいにしましょう」と。「農地はまた元に戻すようにやりましょう。あるいは他のこともいろいろ工夫してみましよう」と。そんな話はできるんですが、一番皆さんが困っていたのは「家の中に入れぬい」とか「家の中がガチャガチャだ」と。そういうところはボランティアの方が県外からだいたい6,000人くらい来ていただきまして、うち県内からも2,000人ぐらいいたと思いますが。そういうことで助かったわけでありまして、ただ家を直すことができない。結局、このままだと道路や川はきれいに元通りに戻っても、住む人がいなくなってしまうのではないかという極論さえ感じられるようになったわけでありまして。そこで鳥取県では、当時のタブーを破るような形で、個人の住宅再建支援制度を導入しようということになりました。しかし導入する時、私も市町村長さんのところを回ったりして、お一人お一人と議論をしましたが、財政負担の問題だとか、あるいはどういう範囲で呼び掛けるかとか、非常に難しい作業でありました。しかし、そういう中で一つのスキームを見出し合意点を見出して、鳥取県では住宅の建設に県が3分の2を負担して300万円を限度にやりましよう。住宅保障については150万円を限度にやりましよう。住宅の液状化復旧、これは例えば住宅団地が液状化してしまっていて、そういうところの復旧などに考えた対策であります。石垣とか擁壁も壊れるという地域的な特性の高い災害も発生しました。これが元へ戻りませんと安全な暮らしができません。そこで、これについても住宅の補修に準じた対策を取るということでやりました。こういう対策を打ちまして、全体として住宅関係、建設だとか補修関係で、県費ベースで50億円、それで市町村ベースも含めて90億円ぐらいの負担です。そして住宅液状化、復旧、石垣、擁壁、補修そういうところも入れていきますと総計で100億円ぐらい、地域から公費を補填して、そして補っていくということをやりました。これは後々財政負担になります。震源地に近い日野町は、これで財政が悪化をする引き金を残念ながら引いてしまうということになりました。県として、前の片山知事は借金の返済対策、これは地方の自立だということで、町で全部という話だったんですけども、私が就任した後、今の景山町長と話し合ってスキームを変えまして、返済の猶予を行いながら、財政再建を図っていくこと。やはり、地域としても被った財政負担を辛抱しながら直していくという今方向に転換しているんですけども。とにかく、かなり大きな地域の負担を伴うことであったことは間違いないと思います。当時、国のほうではこうした

ところまでお金が出ませんで、住宅を壊すことだとか、そういうところまではお金が 100 万円とか出るような仕組みであったわけでありまして。このへんはタブーを破って頑張った結果でありました。実は住民の皆さんも大変でありまして、300 万円で家が建つわけではございません。皆さんも容易に分かることでありまして。これは呼び水以上のものではありません。ですから、問題が完全に解決をするわけではございません。地震保険とか入っておられる方は別でありましてけれども、そうでない方にはやはり重い負担が残る、住宅ローンだとかそういうことが残ります。もちろんそのローン対策で無利子に補填していこうというような事業も導入しましたけれども、それでもみんなで辛抱して 10 年間で立ち直ってきたというのが、私たちの正直な感想であります。決して、これがあったので全部助かったというバラ色のものでもなかったのも事実であります。その後、平成 19 年に国のほうでは制度を変えられまして、能登半島沖地震のところから新しい制度が適用されました。県と市町村では協力して、こうした住宅再建支援をやっていこうということに今ではなっております。西部地震、ボランティアの皆さん 5,300 人余りの方に来ていただきました。そして、そのうち県内からは 2,000 人ぐらいの方に来ていただきました。本当にありがたいことでありました。そして、そのボランティア活動の中から様々な今社会福祉の活動なども生まれていまして、日野ボランティアネットワークの皆さんは、フィールドを広げて地域の信頼を得ながら活動を今でもされておられます。西部地震の教訓を踏まえて、やはり迅速な生活基盤の再生ということをしなないと過疎化がさらに進んでしまうんじゃないかということがあったと思います。それから発災直後、なかなか情報収集が難しいです。阪神大震災の時、段々と死者の数が増えていくことで、だいぶ非難めいた話がありましたけれども、我々現場にいて、なかなかどれだけの方が犠牲になったかというのを判断するのは本当に難しいです。我々のところは幸いゼロのまま済みましたから良かったですけども、見つかってきて少しずつ夜が明けて分かってくるというのはたくさん出てくるのだと思います。ただ、迅速に空から陸からいろんな情報収集をした上でやらなければいけないなあというふうに思います。それができないと災害の初動対策もうまくいかないわけでありまして。外部からの応援も必要です。県庁からも応援をだいぶ出しました。2,000 人ほど延べで出した次第であります。物資備蓄の必要性。当時は県市町村、まだ物資の備蓄はほとんどできていない状況でありました。自助・共助の重要性、公助と共に必要だという限界も感じたわけでありまして。そうした記憶を踏まえまして、先ほど申し上げました住宅助成であります。今、国制度が平成 19 年からある程度導入されました。それを補うような形で現在ではなっていますが、住宅再生の支援資金を鳥取県で市町村と一緒に積み立ててきております。今、17 億ほど積み立てておりますけれども、目標 20 億を目指してやっております。国制度が適用されないところ、全県で 10 戸以上の住宅が全壊となったような場合に適用しようというルールで、我々のほうでは基金を作ってきております。幸い今まで、発動したことはございませんでした。国制度のほうは、先ほどの能登の地震など各地の災害に役立てられ始めたところでもあります。鳥取県のアイデアから、新潟を經由して全国へと広まった。そういう制度ではないかと思っております。それから、県庁の対策でありますけれども、災害時の緊急支援チームというものを作ります。土木技師だとか、建築技師だとか、保健師だとか、事務要員だとか、当時西部地震の時の教訓を得ますと、こういうようなチームを組んで派遣をしていくというのが良いというのを経験的に思いました。こ

うしたチームを組みまして県内は元よりであります、県内の台風災害とかというところにも出て行きますけども、県外でも新潟だとか、いろんなところに出て行かせていただいております。さらに職員災害応援隊という組織です。西部地震の時に、ボランティアだけでなく、「県職員でもボランティアとして出て行こう」という呼び掛けをしました。それで、ビニールシートを張るとか、畳をもう一回やり直すとか、家を片付ける達人が県庁の中にも結構生まれまして、そうしたメンバーが中核になりまして、現在316名の職員災害応援隊というボランティア的な活動を中心とした活動を行う組織を作っております。これも、例えば豊岡での水害とかいろんなところに出て行っています。先般の佐用の水害の時にも出動いたしまして、兵庫県で活動させていただきました。それから、県と市町村での連携の備蓄も進めております。県のほうでは大きめの物、市町村では身近な物という分類で役割分担をしてやるようになりました。さらに、民間の皆さんとも協定を結びまして、例えば食料品だとか、あるいは日用物資だとか、スーパーマーケットとか、様々なところと協定を結んで供給をしていただける体制ができてきております。鳥取県西部地震の教訓を踏まえて、昨日もお訪ねいただいたかもしれません。平成18年に日野町に展示交流センターを造っています。これが、今の日野ボランティアネットワークの活動拠点にもなっているという次第であります。災害に強い地域づくりをやろうということで、今年の7月に鳥取県で防災危機管理条例を制定しました。お互いの役割をはっきりし、リスクを勘案した戦略的対応をしよう。役割を明確にするということではしておりますが、特に防災危機管理活動を強めようとか、災害のない町づくりを進めようとか、高齢者・障がい者の災害事業援護者を助けるということ、この情報共有も含めて条例に書きました。関係者相互の連携を図ることなどあります。こうした甲斐あって、今年度の末までに全部の市町村で災害時の要援護者の名簿ができる見込みになりました。また、それぞれの市町村での全体計画、そういう要援護者の救出をする計画が整う運びになりました。ただ、いろんな訓練だとか、個別の計画・プラン作りも必要だというふうに考えております。また、つい先だってはこうした条例に基づきまして、震災対策のアクションプラン、死者数80%以上、直接被害額40%以上減少させようという減災プランを作りました。住宅の耐震化だとか、あるいは自主防災組織、そういうものを整えていこうということでもあります。地震があれから10年経って、思い出話だけに終わってしまうのではなくて、もっと生き活きとしたことにしなきゃいけない。昨日は、日野町の根雨小学校・黒坂小学校の発表を聞いていただけたと思います。地震の恐ろしさ、あるいは助け合うことの大切さ、普段からの備えの必要性。こういうことを肌で感じてもらおう。幸い、この地には地震を身近に体験をして、そこから立ち直って立ち上がった人たちがたくさんいます。そういう人材を活かして、そういう教育をしよう。京都大学の防災研究所に委託をしまして、今そうしたカリキュラムを作ろうとしているところであります。さらに、これは先日みのもんたさんの番組でも取り上げられて誉めていただきましたけども、中山間集落見守り活動というのを鳥取県で全国では際立った活動だと思っておりますが始めております。右上のほうにありますのは、これは「あいきょう号」というやつでございますけども、安達商事さんという、走り回るコンビニエンスストアみたいなものです。これを、車は県のほうで助成をして造っているわけでもありますけども、こうして見回る人たちがいっぱいいるわけですね。日本海新聞社さんという新聞社とか、あるいは生協さんだとか、あるいは大山乳業さんのように牛乳を配ると

か、いろんな形で地域の中を毎日回る人たちがおられるんです。こういう皆さんと協定を結びまして、「お年寄りに異変があったよ」とか。最近、消えた高齢者問題がありますけども、鳥取県内ではこれは起こっていません。「こうした活動も影響しているのかなあ」と、みのもんたさんは総括されていましたが。私たちが言うよりも、みのもんたさんが言ったほうがよっぽど説得力がある。残念ながらそうなんです。みのもんたさんには誉めてもらいましたが、災害関係もそうですよね。そういうことでも役に立つ、そういう協定であります。それから、自主防災組織。日野町だとか、日南町、意識の高いところ100%のところも出てまいりました。残念ながら鳥取県内はまだ3分の2程度でありまして、全国平均を若干下回っています。こういう場所で申し上げるのがいいのかどうかはあれですけども、この近所だと米子市さんとか、境港市さんとか、2割、3割ベースの組織率というところもございまして、もっと一生懸命できないかなあというふうに思っています。こういうシンポジウムをきっかけにして自主防災への意識が高まればなあと思います。ただ、境港市さんでもすばらしい活動をやっているところはございます。例えば、米川の自主防災会。これは、境港で震度6強の地震があった時に威力を発揮しました。自主防災会がありまして、そして既に活動を始めておられたわけです。それで、自転車で被災住宅を全部回りまして、安否確認を速やかに行いました。それから、近くの安全なところに誘導をして炊き出しを始めたり、本当に早い段階からスタートが切れました。こんなような経験があるものですから、鳥取県内で「やってみよう」というところが出てきております。黒坂地区の自主防災会、これも良い活動をされていることがよく例に挙げられますが、ここは昔からであります。京都もそうありますけども、まちちゅうと言われるそういう伝統があるんですね。隣近所、みんなで一緒にいろんな活動をする。本当にいろんな活動をします。例えば、因幡二十士というそういうこの地域のストーリーがあるんですけども、幕末に活躍した志士がいらっしゃいます。それが居留していたお寺を検証しようという活動をやるか、あるいは黒坂城というお城を盛り上げていこうとか、普段からいろんな活動をしているんです。そういう一環として、自主防災委員会というのを立ち上げられまして、地震の後です。それで、避難所いきなり行くのは難しかろうと。まず仮避難所、22箇所的身近なところにまず連れて行く。そこで集まって点呼を取って、そして本当の避難所のほうへ行く。そういうのを編み出したり、あるいは竹竿と毛布だとか、あるいはジーンズのようなそういう服とかで応急の担架を作ってやるような、そういう工夫を編み出したり。いろんなことをされておられます。江府町でも池の内自主防災組織では、留守を任せろということをもっとにしまして、老人クラブの皆さんが平日の昼間に防災体制をやるということになります。今、お年寄りがお年寄りを助ける時代なんですね。黒坂の皆さんもそういうふうにおっしゃっています。それが今の避難の難しさではないかということでもあります。まだまだ話したいことはいっぱいあるんですが、シンポジウムだとかそれから室崎会長のお話などもございますので、時間も来ましたので、このあたりで私のご報告は終わらせていただきたいと思います。ベンジャミン・ディズレーリというイギリスの宰相であります、19世紀の後半、特にヴィクトリア女王に可愛がられたことで有名でありまして、桜草をたびたび贈られていたというそういう逸話もある方です。この方がこういうふうに言っています。「行動したからといっていつでも幸福になれるわけではない。しかし、行動なくして幸福を得ることはできない」「Action may not always bring

happiness, but there is no happiness without action.」というふうに言っています。あるいは、こういうこともディズレーリは言っているんですね。「We are not creatures of circumstance, we are creators of circumstance.」と言うんですね。すなわち、「私たちは状況によって作られるものではない」と。「環境によって作られるものではない」と。「私たちこそ状況を作り出す、環境を作り出すものなんだ」と。こういうように言っているんですね。やっぱり行動を起こすこと、これが災害に立ち向かうこと、そして暖かい地域社会を守ること。ご近所付き合い、そういうところが本当の意味で中山間地の災害対策なのかもしれないと痛感をします。我々の地域社会を本当に暖かいものにしていくことで、安心の仕組が生まれます。ぜひとも、今日のシンポジウムを通じて皆さんからいろんなお知恵を出していただき、未来の日本を創っていただきたいと思います。本当にありがとうございました。